

ヴァルツ王の ヴァイオリン

アマテイの音色

文 小宮正安

写真 原寛行

ヨハン・シュトラウス2世が愛用していたヴァイオリンが日本にやって来た。1615年製のアマテイ・ヴァイオリン。シュトラウスはこのヴァイオリンで『ウィーン気質』などのワルツの数々作曲したという。100年の時を超えて蘇ったシュトラウスのヴァイオリンの音色やいかに。





座している。ガラス・ケース本体もシュート
ラウス自身が愛用していたもので、その
中にはかつて、父親の形見のヴァイオリ
ンと、シュートラウス本人のヴァイオリンが
保管されていた。しかしシュートラウスの
死後、この2挺のヴァイオリンは人手を

要があった。それを実現したのが、弦楽
器の権威として国際的な名声を得ている
第一人者、デイトマール・マッホー
ド氏だったのである。ヴァンテージ・ヴ
ァイオリンの修復や販売を専門とする会
社のオーナーであり、現在大学で教鞭も



ヴァイオリンの鑑定証

トラウスが自分自身のために書いたもの
と考えることもできる。
そんなシュートラウスにゆかりのヴァイ
オリンの一つが、先日日本へとやって来
た。それも展示目的ではない。演奏者によ
って、実際に奏でられるためである。
演奏にあたったのはカレン・マレイ氏。
アイルランドの出身でウィーンに学び、
現在はアメリカを拠点に、演奏や教育の
分野で活動をおこなっている。今回の来

日は、自身が結成したアンサンブルであ
るヴァイナー・ゾリステン・アンサンブ
ルを率いての形となっており、シュート
ラウス・ファミリーの作品を中心に構成さ
れたプログラムだった。そしてその演奏
会で彼女の手に握られていたのが、かつ
てシュートラウスによって所蔵されていた
ヴァイオリンというわけだった。
それにしても、画期的な試みである。
このヴァイオリン、普段はウィーンにあ
るシュートラウス記念館に保管されてい
るからだ。シュートラウスの肖像や、華麗な
舞踏会用衣装と並んで、ふち飾りのつい
た立派なガラス・ケースの中にそれは鎖



アマティ・ヴァイオリンを持って
来日したカレン・マレイ氏



1615年製アマティ・
ヴァイオリン

この楽器の虜だっ
た。ヴァイオリンを
片手に指揮をとるそ
の姿は、ウィーンの
市立公園の立像でも
お馴染みだろう。作
品中、随所に聴き取
れるヴァイオリンの
華麗なソロは、シュ
ートラウスが自分自身のために書いたもの
と考えることもできる。



私がどう弾くのかを決めるのではなく、
ヴァイオリンがそれを教えてくれます

カレン・マレイ氏来日

ヨハン・シュートラウス2世ゆかりの楽
器はと問えば、まずはヴァイオリンとい
う答えが返ってくるにちがいない。

父であるヨハン・シュートラウス1世が
ヴァイオリンの名手だったことが影響し
てか、息子のヨハン・シュートラウス2世
（以下シュートラウスと略）は、幼い頃から